愛仁親王光格天皇御猶子

文政十一年八月廿三日親王宣下○略節

〔議奏日次案〕寶永七年八月十一日甲辰、東山院若宮、秀宮親王家可有御取立之由被仰出之、享保三年正月十二日辛酉、以秀宮可被稱閑院之由、内々法皇(靈元)思召被尋進云云、令櫛司前大納言被仰於宮方、廿三日壬申、辰刻親王直仁宣下陣儀也、上卿藤大納言、永福辨兼榮、勅別當源大納言、惟通奉行職事重孝朝臣、爲御祝儀御大刀御馬代黄金十兩鯛二尾昆布一箱御樽一荷被遣之、御使園中納言、二月十一日庚寅、直仁親王今日元服、被任彈正尹、參入自長橋車寄方被參於常御所被拜龍顏、申次右大將公全賜二獻女中之沙汰爲御祝儀御大刀一腰、御馬代黄金二十兩一匹、紗綾十卷、紅白昆布一箱、鯛一折、御樽一荷等被遣之、御使兼親、

〔光臺一覽〕親王家と申は、伏見、京極、有栖川、閑院の宮也、已前は三軒にて有しが、中御門院の御父帝東山院、宮方多くいまし、ける中に、新大典侍の御腹とて、櫛笥前故内大臣隆賀公之御女之腹に御兩宮、中御門院は御せうと、今の閑院直仁親王は秀宮とて御弟也、外に女院の御本腹に、一ノ宮貴(タカ)の宮樣とて、姫宮一方居坐かりける、寶永六己丑年極月十七日東山院崩御の砌も、貴の宮樣と秀の宮樣とは、御部屋住にて御座被成けるを從關東被及聞食、御諸司代松平紀伊守信庸江御書到來せり、其寫し傳奏衆へ參り拜見覺ェ居申候、御文言には、

一秀宮之御事、東山院御病中、被遊御苦勞候段被爲聞召候に付、今般親王家一家新規に被成御取立、家領千石被遣之候、是者格別之思召依有之、後々之例には難相成思召候御事

右之趣、兩傳奏衆迄其方差越、急度可申達旨御諚之御事候、恐々謹言、

御老中連名印如前

月日　　土屋相模守名乘書判

松平紀伊守殿